

用である。年々増加し平成3年度には1479件に達し、最も多いのはCTの849件、次いで内視鏡332件などである。以上の病診連携の実績を第30回全国自治体病院学会で発表したところ、最優秀演題として表彰された。

63. 筑波大学における腎移植の現況

大塚雅昭, 深尾 立, 轟 健
石川詔雄, 折居和雄 (筑波大)

筑波大学では、1977年より1992年までに生体腎移植51例、死体腎移植14例、臍腎移植1例が行われている。5年以上生着例は19例、10年以上生着例は6例いるが、約半数は多剤併用例である。多剤併用例のCYA血中濃度はおおよそ70-80ng/mlであり、CYAの慢性腎障害の軽減には、多剤併用は必要と思われる。CYAを併用したDSTは25例に行われている。拒絶反応の頻度はDST(-)例と同様であるが、一人当たりの回数はDST例が少なかった。

64. 腎移植者へのアフター・ケアについて

林 良輔 (高橋クリニック)
鈴木盛一 (国立循環器病センター)
雨宮 浩 (国立小児病院)

腎移植者のQOLを高める面において最も大切な移植後の外来受診をより機能的にするために、管理外来を設立した。医学的に十分な説明を行い、副作用の多いステロイド剤の減量を試み、また合併症に対しては食事指導などを徹底させ、薬剤の投与量を抑えた。社会的精神的にも移植者の支えとなるように、MSWなどの協力を得て対処している。移植者に合わせた移植医療を展開し、臓器移植の推進活動にも協力してもらおうと考えている。

65. 北里大学における臓器移植の現況

渡部浩二, 柏木 登
(北里大・免疫学)

本学の腎移植総数は21年間で322例、そのうち生体腎230、死体腎92例である。今回、生体腎移植の10年生着例30例の長期予後に関わる因子について、10年未満生着例の79例と比較した。その結果、術後早期の拒絶反応が少なく、腎機能が良いこと、組織適合度が良好であること、および合併症を少なくすることの重要性が再確認された。また、新しいHLA-DNA typingやイヌの腎移植に対する免疫寛容の成功例について紹介した。

66. cell adhesive matrix (CAM) プレートを用いた抗癌剤感受性試験

Vladimir A. Kuzmichev (千大)

CAMプレートは細胞接着を促進し、培養液中のホルモン、EGFなどと相まって腫瘍細胞を増殖させる。本法を用いた抗癌剤感受性試験は、細胞増殖の抑制を見るため、生体内での状況に近似すると思われる。術中標本、生検材料から腫瘍組織を採取し、抗癌剤(アドリアマイシン、マイトマイシン、シスプラチン、5-FU)と2週間培養し、アルコール固定後、クリスタルバイオレットにて染色し、画像解析システムにてOD値を測定した。対象の増殖値と比較した薬物別90%抑制(IC90)値を求め検討した。症例は胃癌8例、大腸癌1例の9例である。切除標本より6検体、生検材料より3検体採取したが、 $6-48 \times 10^4$ 個の十分な数の腫瘍細胞を得る事が出来た。8検体(89%)において感受性試験を遂行できた。生検材料での感受性試験が可能である事は、手術不能例への投与、術前投与など、今後の臨床応用に有用であると思われる。

67. 胃癌術前腫瘍レンチナン局注療法における組織免疫能の変動に関する検討

木村正幸, 小澤弘祐, 飯野正敏
村岡 実, 佐野友昭, 森川丘道
有馬秀明 (沼津市立)

胃癌術前レンチナン局療法が腫瘍部・1群リンパ節・2群リンパ節の組織免疫能に及ぼす影響について、非局注10例、局注16例(2mg 5例, 4mg 6例, 6mg 5例)計26例について検討を行なった。Leu 2陽性細胞出現率は、局注群において有意に低率であり、IL-2-Rは、有意に高率でレンチナンの局注により免疫能の向上が得られている事が示唆された。又局注群間における免疫能の差は認められなかった。

68. 腹膜播種性転移性胃癌症例の検討

渡辺義二, 入江氏康, 石島秀紀
山崎将人, 太田 真, 佐藤裕俊
(船橋市立医療センター)

腹腔内洗浄細胞診陽性例(Pmicro)を加えて手術例65例中腹膜転移例はP₁ 21例, P₂ 27例, P₃ 43例, Pmicro 34例の計125例(19.0%)であった。術式の内訳は、切除術95例、胃腸吻合術10例、試験開腹術20例である。切除例の腹膜転移の程度別の累積生存率はPmicro, P₁,